

「が」の導入

—初級日本語教科書の中に出現する「が」の扱い—

Introducing Subject Marking particle “-ga”

—A Research on How and When Subject Marking Particle “-ga” is introduced in Japanese Text Books—

池田 英喜

It seems to be very difficult for Japanese learners to master (or maybe for Japanese instructors to teach) how to use particles “-wa” and “-ga” in Japanese. But is it really that difficult? In this article, I will show you 1) some common problems Japanese text books have and 2) my simple and easy solution to this.

はじめに

日本語学習者はその学習過程で、必ずと言っていいほど、助詞「は」と「が」の使い分けの問題に直面する。特に中上級の日本語学習者にとっては、「は」と「が」の使い分けは、いつも頭の痛い問題である。

ところで、「は」「が」という助詞は、特別習得の難しい文法事項なのだろうか。本稿では、市販の初級日本語教科書を調べ、「は」「が」の習得を困難にしている原因は何かを探ってみた。するとそこには思わぬ落とし穴があることが分かった。「は」「が」が特別難しい助詞として日本語文法に君臨しているのではなく、その導入の仕方に問題があったのだ。

さらに本稿では、将来的に学習者が「は」「が」を少しでもうまく使い分けられるように、より効果的な「は」「が」の導入の仕方を提示する。

1. 各種日本語教科書における「は」と「が」の扱い

初級日本語教科書15種について調査を行った。調査内容はごく簡単で、それぞれの教科書の中で、どのような段階で助詞「は」「が」を導入しているかを見た。なお、個別の調査結果については本稿末に資料として添付しているので、そちらを参照いただきたい。

予想通り、どの教科書も最初に登場させているのは「XはN(=名詞)です」という構文であった。これは、初回またはそれに近い初期の授業で、ほとんどの学習者が助詞「は」と

の対面を果たしていることを意味する。もちろん「おはようございます」「ありがとう」といった挨拶文を最初に導入している教科書もあるが、日本語という外国語で文を作れるようになるという目標達成のために、最初に紹介される文法事項、そしてそれを含んだ具体的な例文は、ほぼ間違いなく「XはNです」構文だという事実を示している。またこの例文には特別な説明はない。もちろんこの時点で「は」には取り立ての機能があり、主題を表すなどという説明はない。

いっぽう「が」についてはどうか。私が見た15種の教科書に限っていえば、Situational Functional Japanese（以下SFJと表記）（1995 凡人社）の第2課で、述語動詞の動作主を示す、いわゆる主格の「が」が登場する。しかしそれ以外では、述語動詞の動作主を表す「が」が教科書の早い課で登場することはない。SFJ以外で最も早く登場する教科書は「げんき I」（1999 The Japan Times）だったのだが、「誰が…しますか」という疑問詞疑問文の中で初めて登場させている。これは動作主を表す「が」を導入するためではなく、あくまで会話の流れの中で、疑問詞疑問文のときには「は」が「が」に変わるという、例外的な扱いとして出現していると考えられよう。では実際にはどういった形で述語動詞の動作主として「が」が登場させているのかを見てみると、15種類中9種類が存在文の存在主体を示す「が」を最初に導入している。残りの5種類には、述語動詞の動作主体を表す「が」の記載さえない。また「Xが好き/嫌い」といった構文で、いわゆる形容詞述語とともに、また「Xがわかる/できる」といった構文で、「が」を導入している例もある。これらは動作主体を表さず、ある種の精神活動が及ぶ対象を示す助詞として導入されている。

2. 文成立に必須の「が」

ところで日本語母語話者にとって助詞「が」はいかなる存在であろうか。まず以下の例文を比べてみたい。

- (01) 私は、お酒が好きだ。
- (02) 象は、鼻が長い。
- (03) イズナーやカルロビッチは、背が高い。
- (04) 彼は、英語ができる。
- (05) 新大生は、英語が使える。

ここに挙げた文は、いずれも以下のように「が」とそれが示す言葉を欠くと文として成立しない。

- (06) 私は、 ϕ 好きだ。
- (07) 象は、 ϕ 長い。
- (08) イズナーやカルロビッチは、 ϕ 高い。

(09) 彼は、 ϕ できる。

(10) 新大生は、 ϕ 使える。

「お酒、鼻、背、英語」といった言葉は、いずれも「好き、長い、高い、できる、使える」という述語にとって、文を成立させるのに欠くことのできない必須要素である。通常「好き、長い、高い」の3つはいずれもイ形容詞、「できる、使える」は動詞として分類されていることは、いまさらここで説明の必要はない。「できる、使える」は動詞でも、「する、使う」という動詞の可能形という特殊な意味を帯びた形に変わっているという主張もあろうが、「形容詞、動詞という品詞の区別は、あくまでその形を基にした分類である」という立場に立てば、「できる、使える」はいずれも間違いなく動詞である。

また、文を成立させるのに欠くことのできない必須要素とは、通常、動詞を述語にして文を作るときに、最低限必要とされる要素^{注1}である。文成立のために最低限必要な要素と動詞の意味関係を示す働きを助詞が担い、その筆頭が「が」であり、動作の主体を表すのが一般的である。

これまでの話を整理すると、動詞とごく一部の形容詞は、文成立のために絶対に欠くことのできない要素を「が」で示し、これらは動作主体もしくは動作の及ぶ対象を示すということになる。

3. 「が」使用の典型例

ここでは日本語教科書で「が」をどのように紹介し、導入すべきかを論じてみたい。各種教科書で日本語学習の早い段階で存在文を導入しようとしていることはすでに述べたとおりである。今回の調査では、15種類のうち、実に13種類が存在文とともに「が」を導入している。ここで考えるべきは、存在文にとって必要な要素である「が」は、「が」の典型例であるか否かという点である。存在文は動詞述語を用いて作成される構文であることは間違いがないが、動詞が動的事態^{注2}を表してはいない。いわば周縁的例外的動詞文と言える。その中で用いられている「が」は動作主ではなく、その存在主体を示すことになる。これは「が」の使用の典型例とは言えないのではないだろうか。日本語のほとんどの動詞は動的事態を表す。そしてそれに伴って出現する「が」は、その述語動詞の動作主体を示す。これこそが、「が」の使用の典型例だと考えるべきではないだろうか。

4. まずは典型例の習得

では、どのような構文を紹介すれば、「が」の機能を学習者はスムーズに理解できるようになるのだろうか。将来的に多種多様な文を、学習者が自分で創造する、できるようになるためには、まず典型例を確実に習得すべきであると考えられる。日常的に用いられるであろう特殊な文例、たとえばその典型にはあいさつ文などが考えられるが、そういった文は概して生産

性が低い。それらは、限られた特殊な条件下でのみうまく機能するものであり、それを習得したからと言って、いろいろな意味を自分で創造できるようにはならない。

それを考えると、「が」の導入に存在文を用いるのは、かなりリスクなことだと言えよう。ここで考えるべきは、述語動詞が文を成立させるために最低限必要とする要素を示す「が」以外の助詞と並べて紹介することではないだろうか。

1 項動詞：「が」V（単純動作）

2 項動詞：「が」「を」V（非単純動作）、「が」「に/へ」V（移動）

3 項動詞：「が」「を」「に」V（授受）

またここで用いられる助詞は、いずれも「は」に置き換えることにより、提題化できるという大きな特徴があり、この点については、SFJが第2課で述べている。例えばここでは「走る」という単純動作を表す述語動詞について考えてみる。

(11) ジョコビッチが走る。

(11) の「ジョコビッチが」は「ジョコビッチは」に変えて、動作主の提題化という操作を行っても、日本語の文 (12) としては成立している。

(12) ジョコビッチは走る。

ここで大切なのは、これら2つの文をどのように使い分けるかという問題は、当然初級学習者が習得すべき範囲を超えているという点である。どちらも日本語としては正しい文であるが、(12) は (11) に提題化という特別な操作を行って作ったものであるという認識が必要であり、提題化というのはどういう状況で必要な機能かということは、少なくとも中級以上の日本語学習者が習得すべき事項であろう。念のため、2項以上の動詞についても同様の操作をして確認してみる。

(13) 私がリンゴを食べる

(14) 友達がアメリカへ行く。

(15) 父が母にメールを送る。

「食べる」「行く」「送る」これらの動詞は、「Xが」という動作主を必ず必要とする。いずれの文もこれで十分意味は満たされており、日本語の文としてちゃんと成立している。それぞれの要素について先ほどと同様に、(13) の「私が」を「私は」、「リンゴを」を「リンゴは」に、(14) の「友達が」を「友達は」、「アメリカへ」を「アメリカは」に、(15) の「父が」を「父は」、「母に」を「母は」、「メールを」を「メールは」に変えても、以下の様にそれぞれ全く問題なく文は成立する。

- (16) 私はリンゴを食べる。
- (17) リンゴは私が食べる。
- (18) 父は母にメールを送る。
- (19) 母は父がメールを送る。
- (20) メールは父が母に送る。

もちろんこれらの文が用いられる実際のコンテキストは、それぞれ明らかに違うだろう。しかし、それは今ここで考えるべきことではない。それぞれの助詞を「は」に変えて文を作っても、いずれも日本語の文法を満たしており、日本語として成立しているという事実こそが大切なのである。なぜなら、日本語の授業で目指すのは、学習者が学習者自身の力で日本語の文を創造し、使えるようになることだからである。そのためには使用場面、機会が限定された慣用的な文例、事例よりも、また文中のある要素の提題化という特別な操作で「が」を「は」に変えて使うことよりも、より汎用性、生産性の高い日本語を習得させることをまず目指すべきだろう。もとより、慣用的表現は覚えることが多いが、生産性は低く、したがって汎用性も低い。平たく言えば、使えないということになる。この事実は、ともすれば学習者の日本語学習のモチベーションを下げてしまいかねない。一方文法事項は、少し覚えれば、その生産性の高さから応用範囲が広く、結果様々な場面で用いることができる。そうすれば学習者のモチベーションの維持にもつながるのではないだろうか。

5. 「は」の典型例とは

ここまでは、「が」の典型的使用例は、述語動詞の動作主を示すものであり、いわゆる主格の助詞として「が」は導入すべきだという議論を展開してきた。ここでは、混用のもととなっているもう1つの助詞「は」は、いったいどのような構文での出現がその典型例なのかを考えてみる。どの教科書にも最初の構文で使用されている点等を考えると、名詞文もしくは形容詞文での出現がまずその基本として設定されるべきだろう。

- (21) 私は学生です。
- (22) 彼女はきれいです。
- (23) 外は雨です。

たとえば(21)は自己紹介の際に用いられる文と考えられる。そもそも紹介というのは、他者と区別して、ある者を際立たせ、その他の者に認識させる必要がある場面である。このような自己紹介の場合は話し手自身を、それ以外の者と区別し、聞き手に認識させる必要がある、そのために主題化という機能を持った「は」という助詞をとまって出現すると考えられる。(22)は形容詞文であるが、紹介文という意味では(21)同様と言える。では(23)はどうか。もし、「雨です」だけなら「どこが？」と問うか、もしくは会話の当事者である話

し手と聞き手がいるその場に雨が降り始めたのかと思うだろう。「外は」があることによって、「雨です」というのが何に対する情報なのかがはっきりするのである。今から述べるのが、何についての情報なのか、それを示すことこそが提題化の機能そのものである。

名詞文、形容詞文は、述語で述べようとしていることが、何の、あるいは誰の情報かを明示しなければ文として成立しない。動詞文が述語動詞にとって必要ないくつかの必須要素を出現させないと文として成立できないことと同じである。同様に名詞文、形容詞文では、何について描写しているのか、その対象を明示してやる必要があるということである。

6. デス文とマス文

ここまではちょっと回りくどい感じで述べてきたが、要は「は」なら「は」を、「が」なら「が」を用いる典型例を教科書の中の早い段階で紹介し、その基本的な使い方を学習者に習得させるように努めるべきだということである。たとえば教科書の第1課に、「XはN/Adj (=形容詞) です」「XがV (=動詞) ます」という2種類の基本文型を紹介するべきである。これら2つの基本文型は、「XはNです」(通称デス文=名詞述語文、形容詞述語文)と、「XがVます」(通称マス文=動詞述語文)である。この2つの文型を最初に、そして同時に紹介すれば、学習者は日本語を学び始めたその時から、日本語で文を作るときには「XはN/Adj です」あるいは「XがVます」のいずれかを選ぶことを習慣にするようになる。助詞の「は」と文末のデスを、「が」と文末のマスをセットにすることで、学習者は「は」と「が」は、それぞれ機能を異にする助詞であるという事実を形として意識化することができる。これは、かなり学習が進むまで他言語では主語として扱われているものを日本語ではすべて「は」で扱うという、のちの「は」「が」の混用の温床となる危険性を回避することにつながる。同時に、本来「は」であるべき助詞が「が」となる場合、逆に「が」であるべき助詞が「は」となっている場合の特殊性を認識し、そこにはっきりとした意味を見出して、学習者はその違いを習得できるようにもなる。

- (24) 私は学生です。
- (25) 私が学生です。(=学生は私です)
- (26) 彼女はきれいです。
- (27) 彼女がきれいです。(=きれいなのは彼女です)
- (28) 外は雨です。
- (29) 外が雨です。(=雨なのは外です)

7. 簡単なものから難しいものへ

「XはN/Adjです」「XがVます」という組み合わせを最初に教えるということは、より単純なものからスタートさせて、徐々に複雑なもの・高度なものへと進めようという提案である。また、名詞述語文、形容詞述語文と動詞述語文では、表現する/できるものが根本的に異なるということも、最初から意識させるように仕向ける必要がある。現に、名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文は、ほぼすべての教科書で課を分けて導入している。ならばその違いそのものにもっと光を当てて、それぞれの形を最初にはっきりと導入した方が、長期的に見た定着が図れるのではないだろうか。例外的で本質から離れたものを、バラバラに紹介していくのではなく、より単純明快なものから教えていった方が、教わる側の負担も軽い。結果として学習者のモチベーションの維持にもつながるだろう。

8. おわりに

本稿では、動作主体を表す助詞「が」が日本語の教科書では、通常かなり学習が進んだ段階でしか紹介されていない事実を指摘し、そのことがのちの「は」「が」の使い分けをより困難にしているのではないかという問題提起を行った。また、「は」「が」の典型的な使い方を習得させるためには、「XはN/Adjです」「XがVます」という2つの基本文型を学習の最初の段階で導入すべきであるという、日本語学習者向けの新しい教科書作成のための試案の一部を紹介した。ではなぜデス文とマス文という2つの基本文型が必要かという点については、それぞれ接続する品詞が違うという形の上での問題について述べただけで、その核心部分は実はまだ説明しないまま残っている。これは日本語という言語の持つ世界観に通じる大事な問題なので、別の機会に述べたいと思う。

【参考文献】

- 仁田義雄（1993）「日本語の格を求めて」（『日本語の格をめぐって』所収）くろしお出版
野田尚史（1996）『「は」と「が』くろしお出版

【資料】

文法事項初出課一覧

	テキスト名	名詞文	形容詞文	動詞文	存在文	動作主体の「が」
1	Japanese For Beginners	Unit 3	Unit 3	Unit 8	Unit 3	—
2	An Introduction to Modern Japanese	第1課	第6課	第4課	第3課	—
3	日本語初歩	1	5	6	3	10
4	文化初級日本語 I	第1課	第4課	第6課	第5課	第19課
5	しんにほんごのきそ I	第1課	第8課	第4課	第9課	第21課
6	初級 日本語	第1課	第5課	第3課	第6課	第7課※
7	Japanese for busy people I	L1	L13	L6	L8	L12※
8	Situational Functional Japanese	第1課	第6課	第2課	第4課	第2課
9	みんなの日本語 初級本冊 I	第1課	第8課	第4課	第9課	第21課
10	初級日本語 げんき I	第1課	第3課	第3課	第4課	第8課
11	新文化初級日本語 I	第1課	第3課	第6課	第4課	第18課
12	Basic Japanese for Students はかせ 1	第1課	第11課	第4課	第8課	—
13	入門日本語	第1課	第3課	第5課	第4課	—
14	日本語初級① 大地	1	7	4	8	20※※
15	日本語がいっぱい	第1課	第6課	第4課	第3課※※※	第13課※

—：動作主体を表す「が」についての記載なし

※：疑問詞疑問文として会話の中で出現

※※：複文中の従属節の主語として出現

※※※：存在主体を「は」で示してある

【教科書出典（初出年順）】

『Japanese For Beginners』（1976）学研

『An Introduction to Modern Japanese』（1977）The Japan Times

『日本語初歩』（1981）国際交流基金

『文化初級日本語 I』（1987）文化外国語専門学校

『しんにほんごのきそ I』（1990）スリーエーネットワーク

『初級 日本語』（1994）東京外国語大学 留学生日本語教育センター

『Japanese for busy people I』（1995）講談社

『Situational Functional Japanese』（1995）凡人社

『みんなの日本語 初級本冊 I』（1998）スリーエーネットワーク

『初級日本語 げんき I』（1999）The Japan Times

『新文化初級日本語 I』（2000）文化外国語専門学校

『Basic Japanese for Students はかせ 1』（2002）スリーエーネットワーク

『入門日本語』（2006）アルク

『日本語初級① 大地』（2008）スリーエーネットワーク

『日本語がいっぱい』（2010）ひつじ書房

注1

ある動詞を用いて文を成立させる際に、最低限必要な要素を項と呼び、その数から1項動詞、2項動詞、3項動詞と呼ばれ大きくは3種類に分類される。場合によっては形容詞も項を持つものがある。例えば、イ形容詞の「痛い」やナ形容詞の「好き」などは、「頭が痛い」や「りんごが好き」というように、「…が」を示さなければ、それらを述語に用いて文を成立させることはできない。

注2

動詞は典型的には、ある時間内に起こる何らかの変化の「始まり」と「終わり」をはっきりと意識することができるものを言語的に表していると言える。例えば「歩く、食べる、立つ、死ぬ」などがそれにあたる。しかし、「ある、いる、そびえる」などは、どの時間をとっても何も変化はしない。しかし、形の上では明らかに動詞として振舞っている。形式のみ動詞であり、表す意味は動詞ではないという、非典型的な動詞と言える。